

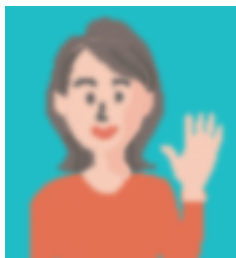
# 視覚障害

視覚障害には、まったく見えない「全盲」、見えにくい又は多少は見える「弱視」、特定の色がわかりにくい「色弱」があります。

見えにくさも、「細部が見えない」「視野が狭い」「視野の一部が欠けている」など様々で、周囲の明るさなどの環境によっても異なってきます。



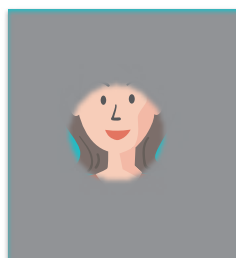
正確な見え方



ぼやける



まぶしくて見づらい



視野の中心部しか  
見えない



視野の周辺部しか  
見えない

## コミュニケーションの配慮とポイント

障害の程度によって白杖を使用したり、盲導犬を伴っていますが、すべての視覚障害のある人が白杖の使用や盲導犬を同伴しているわけではありません。

困っている様子の人がいたら、まずは「こんにちは」などの挨拶や、「何かお困りではないですか？」と声をかけてください。

### ● 話しかけるときは相手の斜め前から

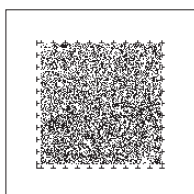
視覚障害のある人は、背後から話しかけられても、誰に向かって話しかけているのかわかりません。相手の名前を呼んでから話しかけたり、自分の名前や肩書を名乗ってから、話し始めてください。話しかけるときは相手の斜め前から、または相手の方を向いて行きます。緊急時などの声かけで気が付かない場合は「盲導犬を連れている方、危ないので停まってください。」など、具体的に声をかけることが必要です。

### ● 介助するときは必ず声をかけてから

いきなり手をとって「入口はこちらですよ」などと誘導することは、不安や恐怖を与えてしまいます。まずは、「何かお手伝いしますか？」と、介助が必要かどうかを確認しましょう。

### ● 必要に応じて代筆をする

申込用紙等への記入の際には、必要に応じて代筆をしてください。その際には、記載内容を読み上げて内容を確認したり、記入した内容が正しいかなど、本人に確認しながら行います。



● 「こちら」「それ」などの指示語は使わない

「あちらのドアを……」「この用紙に……」などの指示語では、何を指しているのかわかりません。「今いるところから右手方向に3歩進んだところにあるドアを……」「お手元の利用申請用紙に……」など具体的な説明や『クロックポジション』を活用することも有効です。場合によっては自分の手を添えるなどしますが、体に触れる場合は必ず相手の同意を得てからにしましょう。



クロックポジション  
相手の正面を「12時の方向」、右手を「3時の方向」など、時計の文字盤に見立てて説明

● 「音」がよく聞こえる場所で

視覚障害のある人は、音声から多くの情報を得ています。できるだけ雑音のない場所、かつ音が反響しない環境で話をすると、スムーズにコミュニケーションがとれます。

● 視覚的な情報を言葉で伝える

視覚的な情報を、言葉で伝えることが重要です。この際、障害の程度、スポーツの経験の有無などにより説明の仕方が異なります。うまく伝わらない場合には、触れてもらって理解してもらうことも大切です。

「キャッチボール」と言っても、キャッチボールをした経験のない人にはイメージすることが困難です。実際にボールを手を持ってもらい、お互いに転がすなどして、具体的な動きをイメージできるように伝えましょう。



盲人のための国際シンボルマーク

世界盲人連合で1984年に制定された盲人のための世界共通のマークです。視覚障害者の安全やバリアフリーに考慮された建物、設備、機器などに付けられています。信号機や国際点字郵便物・書籍などで身近に見かけるマークです。(社会福祉法人日本盲人福祉委員会)



「白杖 SOS シグナル」普及啓発シンボルマーク

「白杖 SOS シグナル」は1977年に福岡県盲人協会によって考案され、2015年に岐阜市によってシンボルマークが制作されました。

白杖を頭上50cm程度に掲げてSOSのシグナルを示している視覚に障害のある人を見かけたら、進んで声をかけて支援しようという「白杖 SOS シグナル」運動の普及啓発シンボルマークです。

※駅のホームや路上などで視覚に障害のある人が危険に遭遇しそうな場合は、白杖によりSOSのシグナルを示していなくても、声をかけてサポートをしてください。

(岐阜市福祉部福祉事務所障がい福祉課)  
(社会福祉法人日本盲人会連合推奨マーク)

